

ことばを使うこと

津守 真

ことばの達者なY夫と、私は弁当を食べていた。Y夫は普通の幼稚園に通っていて、その日、たまたま、弟と一緒に来たのだった。急にY夫が「泥棒だ、泥棒だ」と大声を上げた。私は何が泥棒なのと問い返ししながら、Y夫が指さす方を見た。M男が後ろのソファに座っていた。それでさっき、私共のわきを人影が通り過ぎたのは、M男だったのだからと気が付いた。そのときに、Y夫の食べていたソーセイジパンを、ひとかじりしたに違いなかった。私はY夫に、「Mくんは、あなたのパンがおいしそうだから、ひと口もらっ

たのでしよう」と言うと、すかさずにY夫は「ひと口じゃない、ふた口だ」と言った。私は思わずおかしくなつて、ことばをよく操るY夫と話を交わしていた。Y夫は、自分が使っている玩具を他の子にさわられるのも特別に苦手である。Y夫と話しながら、私はソファーに座ってこちらを見ているM男のことが気になつていた。そして急いでM男の脇にいくと、M男はやにわに私の顔と首を引っかいた。私は、ことばを話さないM男が、この場面で最も傷ついていたのだと感じた。引っかくことはそれからしばらくつづき、M男の心の痛みはずつと尾を引いた。

M男は自分のことを泥棒と言われたこと、また、ひと口じゃない、ふた口だと言われたことに心を傷つけられたのだろう。Y夫のパンはとられたわけではなく、ほんの少しかじられたか、さわられたのだと思う。私は、それが「泥棒」ということばで解釈されたことに、釈然としない思いを抱いた。子どもも、ことばで自分を正当化する。実際にはそんな大げさなことではないのに、自分の方が正しいということばで相手に印象づける。ことばは良いものだが、そういう魔性を發揮することがある。それは子どもに限ったことではない。

また、日頃、大人と子どもとのやりとりの中でも、大人は不注意にこういうことばを口にして子どもをたしなめる。しかし、これからの世の中ではとくに、相手を敵と認識させ

るようなことばに対して、私共大人は注意深くせねばならないと思う。

M男は、ひと口じゃない、ふた口だと言われたことにも、自分を理解されなかったの思いを抱いたに違いない。ソーセージの好きなM男は、これでも最大の自制心をはたらかせていたのではなからうかと私は後になって思った。その自制心は評価されずに、自分に対する批難が倍になって戻ってきたのである。

その上、この場面での私の応対の仕方も十分でなかった。私はことばの達者なY夫と面白そうに会話しているようにM男には見えたと思う。ことばを話さないM男は、疎外感を味わっていただろう。Y男はM夫に対して怒っていたのではなく、その私に対して怒っていたのかもしれない。ことばを話さない子どもは、ことばでごまかされない。自分の周りで起こっている出来事に、身体のまるごとで感じとっている。そこで子どもが傷ついていることに対して、その子どもの見ているところを代弁して、それをことばにできたら、

——それは実際の保育の場面ですぐに考え出すことはとてもむづかしいことで、ほんの少しずつでも、これから私はそれをできるようにになりたいと思う——。そうしたら、子どもはもっと納得して、その事態に対処することができただろう。ことばを話せる人は、ことばを話せない人に対して、その分だけその人の代弁者となって、足りないところを補ってあげなければならないのだと思う。できない部分をできるように教育するというのは、ある限界内のことである。どうしてもできない部分は、他人が補って、お互いにそうし

合って皆でたのしんで生活できるようにするのが、異質な人間が集まる社会での生き方であらう。そう考えると、幼稚園や学校での社会生活も、大人の社会生活も、もっと楽しく生きるのではないか。



(愛育養護学校)